

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第43号

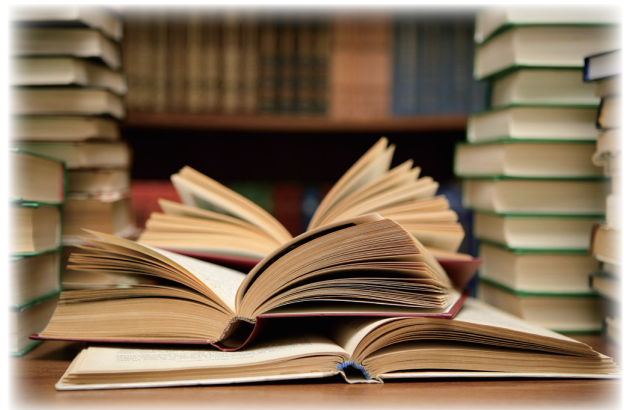
本を読まない教師のぼやき

岡本 崇男

神戸外大では毎年三月の中頃に学年度最後の教授会が開かれる。そして、その年度限りで退職する教員は、この教授会が始まる前に簡単な挨拶をすることになっている。挨拶の中身は人それぞれなのだが、多くの先生は外大での思い出と、これから先の予定などを簡潔に述べられる。ただし、二十年ぐらい前までは、「今まで山のように買い込んできた本をやっと読めると思うとワクワクする」というのが定年退職を迎える先生の決まり文句の一つだったのだが、最近これが聞かれなくなった。その代わり、「二三日前に研究室がやっと片付いた」、「研究費で買った本を図書館に返すのに苦労した」というようなぼやきともつかない発言を耳にするのも珍しくなくなった。また、ここ数年の間に大学を定年退職した先輩方とお話ししても、「北海道にあるロシア・東欧関係図書を扱う書店に蔵書を引き取ってもらってやっとなりきりした」とか「特任教授になれそうなので、少なくとももう一年研究室が使える。本の処分を先延ばしすることができる」など、蔵書の処分にまつわる話題には事欠かない。かつては熱心に買い集めたコレクションであるはずなのに、気がつけば、自分に残された時間で目を通せる本の本数はたかだか知れており、だからといって譲る相手が簡単に見つかるわけでもない。これでは、まるで厄介者扱いである。

むかし、退任の挨拶の中で、これから蔵書を読んで暮らすと宣言された先生方からは、職場を去る哀愁を紛らわすためにそんなことを言っている

という印象を受けないわけでもなかったのだが、それを覆い隠してあまりあるほどに、その先生が若い頃から自分が本を収集してきたことに対する誇り、つまり学者としての矜持のようなものが強烈に感じられた。実際に、読書宣言された先生のお一人は、退職後10年以上にわたって大学生協の取り置き用の書棚にお名前があった。本を買うことが完全に習慣化していたのである。ウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』の映画版では、ショーン・コネリー演じる初老の修道士が老眼鏡を掛けなければ書物が読めない自分を嘆いて若い修道士に「もう書物はわたしのものではない」という意味のことを言っていた。14世紀のヨーロッパでは、本は目が弱る前に読んでおくべきものだったのだろう。しかし、わたしの周囲にいた本好きの先生たち、先輩たちは眼鏡の度数を上げながらも本を買い続けていた。そういえば、この本好きたちの中には、わたしの研究室に入るとまず書棚を眺めて、「へー。こんな本持ってるの」と



か「ところで君『○○○○』という本を持ってる？」と切り出して、ひとしきり本談義をする人が少なくなかった。また、ある人には「君の本棚を見ても、君がどういう方面に興味を持っているのかわからない」と面と向かって言われたこともある。どうやら本好きは、蔵書を見て人の値踏みをするらしい。

確かに、いい本を買いそろえることがその人の価値を高めるということが信じられた時代はあったようだ。例えば、中世ロシアの年代記やその他の古写本の多くは、見捨てられた修道院や教会の保管庫で朽ち果てる運命にあったのだが、18世紀頃のロシアの貴族の間で自分たちの教養の証として立派な個人図書館を立てることが流行したお蔭で救われたらしい。こうしたコレクションを後には国家が文化遺産として保管するに至った。したがって、見栄っ張りの貴族たちの功績は大きかったのである。ただし、その貴族が立派な人間だったかどうかはわからない。

それでは、自分を立派に見せるためにというつもりはないが、将来必要になるかもしれないから本を買いそろえておくというのは、正当化できるのだろうか。「先行投資」と言えば、聞こえがいいかもしれないが、しっかりとした計画もなしに「この分野の本は集めておこう」とか、他人が目の色を変えて買った本だから自分も入手するというような姿勢でいると、いつのまにか本は増える。もちろん、買って置いてよかったということもないわけではないのだが、なぜこんな本があるのだろうかと自問することも珍しくない。動機を忘れてしまっているのである。わたしの研究室を訪れる



学生の中から一人は、本棚を眺めながら「この本全部読んだのですか」と

訊く。たんに「読んでいない」と答えるのが悔しいので、「自分に必要な情報が一行でも書かれている可能性がある本は買うことにしている」と答えるのだが、そ



ういった瞬間に自分が必要とする情報がいかに少ないかを自覚して、とても恥ずかしい思いを

する。そして、その学生にとって、本というのは読みたいから、あるいは必要だから手元に置くものなのであって、決して「先行投資」の対象ではないということを思い知らされる。

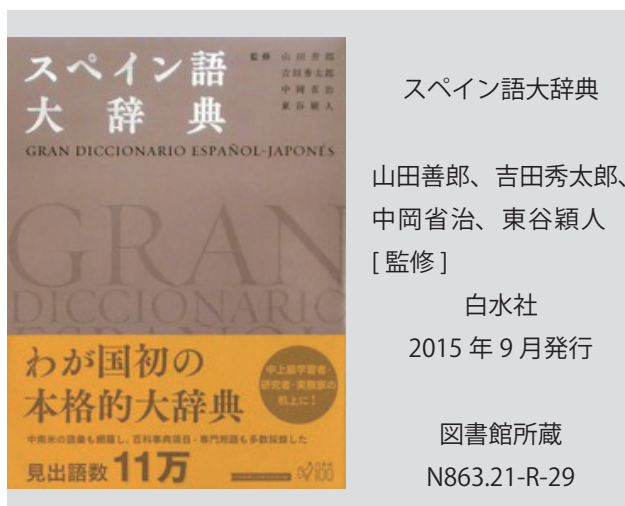
わたしは、本を所有すること自体が悪いことだとは思っていないし、また収集することの価値も認める。本を厄介者にしてしまう最大の原因は、もちろん本を買った当人にある。食材なら腐ってゴミになってしまうところだが、本はカビが生えない程度に通気・換気に気を配っている限り腐りはしないので、読む前に朽ちてしまうのではないかという危機感に襲われることがない。しかし、持っているだけでは、所有者の栄養にはならないし、所有者が自分以外の人々に栄養を与えることもできないのだ。人が苦勞して買い求めた本やコレクションが廃棄処分されたり散逸したりしてしまうのは、もったいないことだ。こうした「成仏できない」本を活せるのは、おそらく大学や公共の図書館以外にない。かつては貴族の虚栄心が掻き集めた書物や文書であっても、国家が管理することで、それらが国の文化遺産になるように、公的な図書館が亡者になりそうな本に命を吹き込むことができるのではないかと思う。

(おかもと たかお ロシア学科教授)

スペイン語大辞典

-通読したくなる辞(事)典-

福嶋 教隆



2015年9月に我が国初のスペイン語—日本語(以下「西和」と表記)の大辞典が刊行されました。収録語約11万、2436ページ。既存の最大の西和辞典の約7万語はもとより、2014年に出たスペイン王立学士院(Real Academia Española)の辞書(第23版)の約9万3000語をも上回る、堂々たる大辞典です。多くの語を収録し、詳しく明快な語釈が施されて、語源解説、例文も豊富であることに加えて、「読む辞典」を目指して固有名詞も見出し語として取り上げ、百科事典的な様相も備えている点が大きな特徴です。

全体の監修4人、辞典執筆25人、事典監修4人、事典執筆7人、計のべ40人、実数38人が携わりました。全体監修に東谷穎人本学元学長、辞典執筆に西川喬ならびに宮本正美名誉教授およびこの稿の筆者、事典監修に木村榮一前学長、事典執筆に野村竜仁教授、成田瑞穂准教授が名を連ね、ここに本学大学院出身の研究者5人、本学非常勤講師・元非常勤講師4人(重複を除く)を加えると、16人もの神戸外大イスパニア学科

関係者がこの記念碑的事業にかかわっていることになります。本誌に、ぜひこの辞書の紹介をしなければ、と思い立った所以です。

日本語話者を対象とした最初の辞書は、金沢一郎の『和西新辞典』(1923)と『西日辞典』(1925)です。ついで村岡玄の『西和辞典』(1927)、Calvoの『日西大辞典』(1937)が出ました。その後、大学書林から、各種のコンパクトな辞典が刊行されました。

1958年に白水社から出版された『西和辞典』(高橋正武〔本学名誉教授〕著)は、多年にわたってスペイン語を学ぶ人や中南米貿易に従事する人に愛用されました。その姉妹編『和西辞典』(1979、宮城昇、Contreras 他)以来、辞書は集団による分担執筆の時代を迎えました。

やがて小学館、研究社、三省堂もスペイン語辞書作りに参入し、それぞれが工夫を凝らした労作で、選ぶのに困るといった、一昔前なら想像もつかなかった贅沢な状態になりました。中でも利用者が多いのは、電子辞書に採り入れられている白水社の『現代スペイン語辞典』、上述の『和西辞典』、および小学館の『西和中辞典』でしょう。

語義は、1冊の辞書を引いただけではつかみにくいものです。スペイン語を学ぶ人は、電子辞書や、各種小型・中型辞典だけでなく、スマートフォン(teléfono inteligente、『スペイン語大辞典』にちゃんと載っています)でスペイン王立学士院の辞書もチェックし、さらに『スペイン語大辞典』をひもといて、この大船に乗って言葉の海へ漕ぎ出して下さい。

(ふくしま のりたか イスパニア学科教授)

司書のおすすめ資料 300 回突破！！

展示紹介

河野 幸徳

2006 年 12 月から開始した「司書のおすすめ」が、2015 年 9 月に 300 回を迎えました。この「司書のおすすめ」は毎週、図書館所蔵資料の中から紹介しています。また、2012 年 4 月からは英米、ロシア、中国、イスパニアの各語学科担当の司書が専攻言語に関する資料に焦点をあて、手書き POP とともに展示をしています。ちなみに、こ

のままのペースで紹介を続けると、500 回に至るのは 2019 年の 11 月…東京で開催されるラグビーワールドカップ 2019 の決勝戦（横浜国際総合競技場）が行われる頃となります。

ラーニングコモンズでは 300 回を記念した特別企画として、過去に取り上げた資料の手書き POP を展示しました。



併せて、閲覧室内では「あらためておすすめします！」として、おすすめ資料から更に選りすぐった資料を展示しました。それぞれの資料は、外大

生であればまず手にとっていただきたい 1 冊です。



さらに、これまで「司書のおすすめ」は外大関係者以外の人目に触れる機会がなかったので、Web上に仮想本棚を作成できるブックログでも掲載を始めました。これにより、図書館で積み重ねてきたデータを広く公開し、大学自体の広報となることも期待しています。

(この ゆきのり 図書館職員)



参加報告

図書館業界最大のイベント 図書館総合展に参加しました

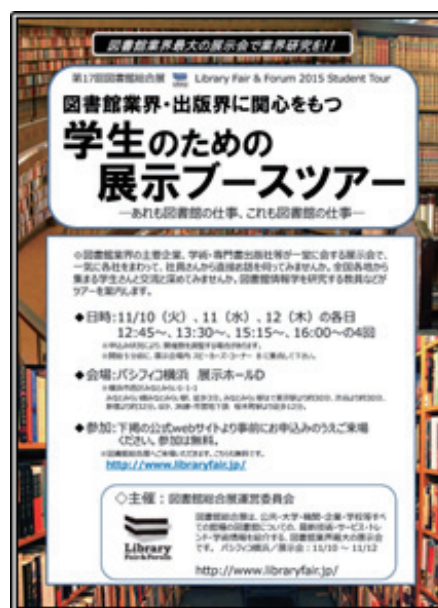
図書館総合展は、2015年で第17回目を数える図書館関連で国内最大規模のイベントです。日本全国から図書館員や出版社などの図書館関連企業の方のみならず、行政関係者や教育関係者も集まります。

図書館総合展は主にフォーラムとブース出展で構成されていますが、今年は図書館戦争に関連したブースがあったためか一般の参加者も多かったです。そのような中、近年では学生の参加者も増えてきました。そこで、今回ご紹介したいのは「図書館業界・出版界に関心をもつ学生のための展示ブースツアー」です。

図書館業界の主要企業が集まる展示会場を、図書館情報学を研究する教員や現役の司書が案内します。一気に各社の情報を集めるチャンスになりますので、この業界に関心のある方には是非おすすめします。実際に、このツアーに参加した方が就職の報告をしに来たという話も聞いています。

2016年は11月8日(火曜)～10日(木曜)にパシフィコ横浜で開催予定ですので、今からスケジュールを確保しておきましょう。

(河野)



秋の図書館イベント

第5回選書ツアーを開催しました

10月28日(水曜)の午後、ジュンク堂書店三宮店にて第5回選書ツアーを行いました。今年は2名の参加者が約30冊の本を選びました。参加者は少なめでしたが、選書本は例年になく興味深いラインナップとなっています。

一言で言うと社会科学系と音楽系の分野ですが、これはぜひ実物を手に取って見てみて欲しいと思います。選んだ人の選書基準が透かし見えるようなタイトルが並んでいます。

また毎年、外大図書館に所蔵がないような図書を選んでくれているのですが、今年は本当に未所蔵の資料かどうかを事前に調査してから参加してくださいました方もいらっしゃり、その熱意に頭が下

がる思いでした。

選書ツアーで選ばれた本は、図書館閲覧室新着図書コーナーにて展示をする予定です。12月半ば頃に展示を開始しますので、どうぞ楽しみにお待ちしております。

選書ツアー参加者自身による手書きのPOPも添えられますので、それを目にするだけでも楽しいと思います。

(須浦)



今年の選書ツアーで選ばれた本

図書館日誌 2015年7月～2015年11月



2015年		8.18-25	蔵書点検・書庫雑誌移動
-7.25	展示「司書のおすすめD」第29回	9.18-11.21	展示「司書のおすすめD」第30回
7.6-8.4	2015年度第2回 Re ユース	9.24	Newsletter No.16 発行
7.27	Newsletter No.15 発行	10.28	第5回選書ツアー
	7月のゼミガイダンス 7回実施		10月のゼミガイダンス 4回実施
8.6	まちづくりスポット神戸見学	11.10	利用者アンケート実施
8.7	子ども参観日	11.10-11	トライやるウィーク(2校4名受入)
8.9/23	オープンキャンパス	11.12	第2回ラーニングアドバイザー
	(専攻言語の図書展示、司書による書庫見学ツアー)		トークイベント

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより

第43号 ISSN 0919-2336

「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です

編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター

〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1

TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257

URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/

2015年11月30日発行 発行責任者：センター長 太田斎



神戸市外国語大学は
2016年に創立70周年
を迎えます。